
ジャポニカ自由帳

青山 黒美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャポニカ自由帳

【Nコード】

N9651Z

【作者名】

青山 黒美

【あらすじ】

自暴自棄に近い自由帳

無題

200個のダイヤを親指で打った。時間にして約3分程度だろうか。
几帳面に、白黒十個ずつだ。こういうところが、いけない。なので
黒のダイヤを一つを消した。

199個のダイヤ。

スタート。

狂った果実を

果実を一口かじる。味はしない。皮の色は黒、実は白い。
無臭。

食感 は 林檎 という より 梨 の よう だ。水分を多く含んでいる。

「レティカ？」

「マウル、クロウニエ……」

「パティス、アラロウネ、シュティ？ パスウロアンネ？」

「ロツ……。カミュウル…ネッツァ」

「パティウロ！！ カ、カティミュ、サバアアサア！！」

女は急に怒りだして男を罵倒しだした。部屋の壁には白と黒のタイ
ルが交互に規則正しく張られていて、天井は薄暗い赤だった。そこ
からシャンデリアが垂れ下がり、ガラスの細かい装飾に時折光がち
らつく。

男が悩ましげに手の平でもって顔を擦りつけていると、女は着てい
る赤いドレスを強引に引っ張る様にして部屋を出て行った。

「パティウロ……」

ベッドに横になった男がそう呟くと、天井からシャンデリアが落ち
てきた。

男はシャンデリアに殺され、女はドアに挟まれている。

狂った果実が床に転がる。部屋の中でクラシックの曲が流れ始め

た。

無作為で出鱈目な曲。

獅子舞い

真夜中、寺の本堂にて、獅子が舞う姿を見た。あの力チ力チと歯を鳴らす音は私の耳へと容赦なく入り込み、胸の奥底の不道德なる映像を呼び起こした。

我が和尚の不埒なる行い。

私は獅子に近づいた。すると獅子は尚更に荒々しく踊り、威嚇するように歯を強く鳴らすのだった。これは夢に違いないと思いつつも、広い本堂でただ踊り狂う獅子の姿はそれでも鮮やかに写った。それは和尚の不埒なる映像と同等、私の心に焼き付いて放れずにいる。

あの狂乱たる舞いは、私が和尚に向ける怒りの表れなのだろう。そして、あの音は……。許せと響くのだった。

『三島文学を破壊、そして大宰論の否定へ』

よい年を願う。

気分崩壊元旦コンビ二餅の系

まさか元旦始まって数分で笑いが起こるなんて奇跡に近い。

しかも相手は坊さんだ。

それは、テレビジョン。『ゆく年くる年』を半ば死んだ様に寝つころがって見ている時に、事件は起きた。

除夜の鐘が画面に映し出され、今年の百八ツを打つという大任を任された坊さんが今だと紐を引っ張る。

一撃が鳴った。

ゴン。

二発目。

コッソソ。

俺は二発目の音がやけに小さいなと思った。この時はまだ、これが奇跡の三発目への伏線だとは誰も考えはしなかっただろう。

三発目を鳴らすために紐を引っ張る坊さん。

今考えると、この時の坊さんの気持ちに同情する。坊さんだって男だ。二発目の音が小さいばかりに大勢から馬鹿にされたんじゃない情けない。

次こそは。と、なるのが人である。

しかし結果、坊さんの三発目は煩惱を打ち消すことなく、足元をおぼつかせながらズルズルと紐に引っ張られ……警備員に支えられて終わった。

この坊さんは我が身を犠牲にして人々に説法を説いたのだ。

坊さんだっ て緊張する。失敗だっ て。
するさ、と。

今朝、コンビニに行くと、この間の女性従業員がいた。
恋とは何か？

ブログと文学文豪卒倒

おそらく、昔の文豪がネットなるものを覗きこんだのなら。

卒倒するだろう。

それだけ文字で溢れかえっているのが、ネットというものだ。

果たして文学は衰退したのだろうか？

結論、してはいない。寧ろ文章を書く技量は昭和の若者と今の若者を比べれば、後者の圧倒的勝利に終わる。

それは何故か？

ブログやメール文化によるものである。

要は単純に文章を書く頻度が日常生活の領域にまで来たのだ。これは進化とは言えない。しかし、進化による退化は必然的に起こる。

また次回にしよう。

恋とは何か？

自己ワードセレーブー

抱擁。

暖かなる部屋の中で、僕は青に逢う。

深海の音を聴きながらカーテンを見つめる。静かな優しさに埋もれたいと願って。

青は僕に言葉を与えてくれたよ。

静かなる安らぎは君の傍らにいつまでも。

柔らかな呼吸をする。淡く小さな声を掛けてくれた君を思い、緩やかに届く微笑みを愛してもいいよ。

「だいじょうぶだから。また、笑顔を愛するの。約束しよう」

静かな呼吸。

柔らかな。

優しさからの、
息を。

大切にね。

作成日 2011年12月25日

自己ワードセレーター（後書き）

これがわかってしまう人とは仲良くできると思う。

無題

朝、目が覚めるとブンブンブン、と音がした。凄まじい音で空気を揺らしている感じだった。

そして自分の視界に驚いた。万華鏡の様に部屋が分裂して映る。手で目を擦った。自分の手が枝の様に細く、黒かった。

考えても解らない。何が起こったのだろうか？ 辺りを見渡すと誰かの部屋のらしい。いくつも同じ部屋が映り込んで頭がクラクラする。

「ん……」

と、声がした。

ベッドに誰か寝ている。近づこうと意識したら地面から浮いてしまった。自分は寝ている人の傍に着陸する。

またも驚いた。

寝ているのはパン屋の娘ではないか。恋をした人だった。

「キャ！」

何故か相手は驚きティッシュの箱でもって……。

作成日：2011・1・28 / 読点を嫌う時期でした・改訂版

まどろっこしい夜だった。私は台所でコオヒイをちびちびと口にしながらボンヤリしているとウトウト眠くなってきた。

「どうしたの？」

月の光が唯一頼りな何も無いただっ広い暗闇と草原の中で私と彼女とを照らし出したのは悲しくも夢？綺麗な黒い髪はさらに暗闇の中で深みを増して白い肌は青白く滑らかに写る。唇が白紫に光るものだから私は勢いキスを迫るのだった。短い間だが彼女と私の唇は触れて離れて放れた間に月が出てくる。

目が覚めるとコオヒイと目が合う。煙草がジリジリと静かに灰を増やしていく。なんて夢を見たんだろう。怖いくらいに現実味を帯びていてそれでいて感覚は無くしかし私の思い出の中の深いところに昔からあるような。コオヒイと目が合う。私は自分の唇を指で確かめた。

どうしようもないほど私は下劣でした。夢の中で自分の意思とは関係なしに起こった事とはいえ見も知らぬ女性に對しいきなりキスをした自分が目が覚めてみてどれほど屈辱的に憐れに感じたか。けれどもそれも数分の事で直ぐにそんな考えを棄てて私は煙草を口にやって吹かしながら「ああ。もう一度会いたい」なぜなら私は薄情ですから。

すると瞼がとろんとさがってきて私は頬を手で擦るもまた眠りの中

へと落ちていくのである。

「離してはいけないの」

手を繋いでいた。彼女の小さな華奢な手は僕の掌に冷たい温度を与えたが同時に僕の淋しい孤独な心の部分を満たしあためてくれているようで幸せとか幸福感満足そんな言葉を使いたくなる気持ちにさせてくれる。彼女は裸足だった。それもそうだなと考えこんな幻想的で素晴らしい夢の中で靴を履いて歩くななんて美しくないし汚らしいとさえ思う私の足元には靴が見え自分と彼女は違う世界に生きる人間なんだなと思い知らされて失望の渦の中に一人引き離された。

煙草をくわえたまま煙がただ上にのびていくのを私はジッと見ながらつまらない夜だなと思い何か適当な暇潰しを考えて頬杖を突いた。しかし不思議とまた瞼が重く下がってきて私の感覚は鈍くなり眠ったら次に彼女は私に何と言って何を魅せるつもりなのだろうかと考える。睡魔と戦いながら私は何度も寝てはいけない寝てはいけないと思いながらついに顔の頬が腕を滑り落ちて冷たいステンレスの上に情けなく顔を横に突っ伏した。水滴が生ぬるく頬に着いてそれが妙に不快さを持っていた。

甘栗。赤い暖簾に白く書かれている。足元には石畳が敷かれ屋台がづらりと連なっている先は霧が濃く見えない。暫く歩いてみて色々な屋台を見たが人が一人も居らずついに霧で何も見えなくなると声が聴こえた。「チャアシユシユマイギョウザニチャーハンダヨ」声は前方から聴こえ段々と大きくなって傍まで来たなと思うと私の眼前には狸が宙に浮いていた。狸と言っても蕎麦屋の前などに置物として立っている作り物の狸である。

「チャアシユシユマイギョウザニチャーハンドヨ」

狸に気をとられ気付かなかったがいつの間にか私の横に薄紅色の着物を着た小さな子供が能の様な面を被って私の背後を指差している。私が振り向くと「あっ！」

自分の声が聴こえたかと思うと私は元の台所に戻って来た。

私は横顔を台の上に付けたまま考える。

そして苦笑しまう。

私は彼女に会って謝ろうそして裸足になって親しくなろうなどと滑稽にも考えていた事に。

夢とは浅はかで偶然な出逢いであった。また逢えぬだろうか……。

我は盗賊。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9651z/>

ジャポニカ自由帳

2012年1月12日22時47分発行